

国語学習プリント

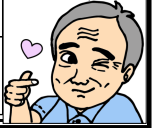
date : 年 月 日

学習内容： 本文 読書

年 組 番

蜘蛛の糸 芥川龍之介

氏名



蜘蛛の糸

芥川龍之介

一

ある日のことでございます。お釈迦様は極楽の蓮池の縁を、独りてぶらぶらお歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のように真っ白で、そのまん中にある金色のすいからは、なんともいえないよい匂いが、絶え間なく辺りへあふれております。極楽はちよつと朝なのでございましょう。

やがてお釈迦様はその池の縁におたすみになつて、水の面を覆っている蓮の葉の間から、ふと下の様子をご覧になりました。この極楽の蓮池の下は、ちよつと地獄の底にあつておりますから、水晶のような水を透き通して、三途の河や針の山の景色が、ちよつどのぞき眼鏡を見るように、はつきりと見えるのでございします。

するとその地獄の底に、犍陀多という男が一人、他の罪人と一緒にうごめいている姿が、お目にとまりました。この犍陀多という男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事をはたらいた大とろぼうでございします。それでもたつた一つ、善いことをいたした覚えがございします。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、道端をはつていくのが見えました。そこで犍陀多は早速足を上げて、踏み殺そうといたしました。が、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものにちがいない。その命をむやみにとるといふことは、いくらなんでもかわいそうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやつたからでございます。

お釈迦様は地獄の様子をご覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けたことがあるのをお思い出しになりました。そうしてそれだけの善いことをした報いには、できるなら、この男を地獄から救い出してやろうとお考えになりました。幸い、そばを見ますと、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけております。お釈迦様はその蜘蛛の糸をそつとお手にお取りになつて、玉のような白蓮の間から、は

二

るか下にある地獄の底へ、まっすぐにそれをお下ろしなさいました。

こちらは地獄の底の血の池で、他の罪人と一緒に、浮いたり沈んだりしていた犍陀多でございます。なにしろどちらを見ても、真つ暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮き上がっているものがあると思ひますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございしますから、その心細さといつたらございしません。そのうえ辺りは墓の中のようにしんと静まり返つて、たまに聞こえるものといつては、ただ罪人がつくつかすかなため息ばかりでございします。これはこへ落ちてくるほどの人間は、もうさまさまな地獄の責め苦に疲れはてて、泣き声を出す力さえなくなつてゐるのでございします。ですからさすが大とろぼうの犍陀多も、やはり血の池の血にむせびながら、まるで死にかつた蛙のように、ただもがいてばかりおりました。

ところがある時のことでございます。なにげなく犍陀多が頭を上げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした闇の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一筋細く光りながら、するすると自分の上へ垂れてまいるではございせんか。犍陀多はこれを見ると、思わず手を打つて喜びました。この糸にすがりついて、どこまでも上つていけば、きつと地獄から抜け出せるのに相違ございせん。いや、うまくいくと、極楽へ入ることさえもできましよう。そうすれば、もう針の山へ追ひ上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもあるはずはございせん。

こう思ひましたから犍陀多は、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐり上り始めました。もとより大とろぼうのことでございますから、こういうことには昔から慣れきつてゐるのでございします。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございします

から、いくら焦つてみたところで、容易に上へは出られせん。ややしばらく上るうちに、とうとう犍陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へは上れなくなつてしまいました。そこで仕方がございせんから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下がりながら、はるかに目の下を見下ろしました。

すると、一生懸命に上つたかいがあつて、さつきまで自分がいた血の池は、今ではもう闇の底にいつの間にか隠れております。それからあのぼんやり光っている恐ろしい針の山も、足の下になつてしまいました。このぶんで上つていけば、地獄から抜け出すのも、存外わけがないかもしれせん。犍陀多は両手を蜘蛛の糸に絡みながら、こへ来てから何年にも出したことのない声で、「しめた。しめた。」と笑ひました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数かぎりもない罪人たちが、自分の上つた後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじ上つてくるではございせんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、しばらくはただ、大きな口を開いたまま、目ばかり動かしておりました。自分一人でさえ切れそうなの、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪えることができるか。もし万一中で切れたとしたら、せつかくこへまで上つてきたこの肝腎な自分までも、もとの地獄へ逆落と落ちてしまわなければなりません。そんなことがあつたら、大変でございします。が、さういふうちにも、罪人たちは何百となく何千となく、真つ暗な血の池の底から、うようよとはい上がつて、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせと上つてまいります。今のうちにどうかしなければ、糸はまん中から二つに切れて、落ちてしまふのにはがいありません。そこで犍陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は俺のものだぞ。おまえたちはいったい誰に聞いて、上つてきた。下りろ。下りろ。」とわめきました。そのとたんでございします。今までなんともなかつた蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下がっている所から、ぶつりと音を立てて切れました。ですから犍陀多もたまりません。あつというまもなく風を切つて、こまのようにくる

国語学習プリント

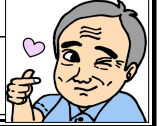
date : 年 月 日

学習内容： 本文 読書 読解

蜘蛛の糸 芥川龍之介

氏名

年 組 番



くる回りながら、みるみるうちに闇の底へ、真逆さまに落ちてしまいました。
あとにはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

三

お釈迦様は極楽の蓮池の縁に立つて、この一部始終をじつと見ていらしたがいまして、やがて毘陀多が血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな顔をなさりながら、またぶらぶらお歩きになり始めました。自分ばかり地獄から抜け出そうとする、毘陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰を受けてもとの地獄へ落ちてしまったのが、お釈迦様のお目から見ると、あさましくおぼしめされたのでございましょう。
しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんなことには頓着いたしません。その玉のような白い花は、お釈迦様のおみ足のまわりに、ゆらゆらうなを動かして、そのまん中にある金色のずいからは、なんともいえないよい匂いが、絶え間なく辺りへあふれております。極楽ももう昼に近くなったのでございましょう。

【教科書の注釈】

①お釈迦様

釈迦牟尼。仏教の開祖。苦学苦行し悟りを得た。

②すい

植物の花の中心にある、おしべとめしべ。

③三途の川

死後、冥土の途中にあるとされる三つの瀬。

④針の山

地獄にあるとされる多くの針が突き立った山。

⑤翡翠

光沢のある鮮やかな緑色をした玉。

⑥むせぶ

食べ物や飲み物などで息をつまらせ、せきこむこと。

⑦無慈悲

思いやりやあわれみの心がないこと。

⑧うてな

「台」の意味から転じて、花びらの部分。

▽場面情景をとらえる

○お釈迦様は①どこで、②なにをしている

①

②

・その場所の時刻帯は

・その場所の特徴

▽毘陀多とはどんな男か

▼善いことをした報いについて

a 善いこととは

b 「報い」とはどんな意味か

▽思わず手を打って喜びましたとあるが、毘陀多が喜んだ理由とは

▽「しめた。しめた。」と笑いましたとあるが、その理由となる一文を書き抜く。

▽どうしてあれだけの人数の重みに堪えることができるか

①このような言い回しを何というか。

形の上では疑問と見えるが、内容としては疑問ではなく相反する方に確信を持っている言い回し

通帯「どつて○○か。」といった形をとり、あとに隠れたいや、○○ない。」を伴う文型

※言ったこととはうらはらはな事柄が本来の意味となる。

②どのような意味をとらえたらよいか。

▽悲しそうな顔をなさりとあるが、お釈迦様が悲しそうな顔をした理由が書かれている一文の最初の五字

☆この作品から感じえたことを書いてみよう。